

# 遊びを通して学び続ける力を育てる保育の研究

香芝市立旭ヶ丘幼稚園 教諭 畠中 茂美

Hatanaka Shigemi

## 要 旨

まず、幼児にとっての遊びや遊びと学びの関連性、学び続ける力について考察する。さらに、事例を通して、遊びの中に見られる幼児の学びの姿やその際に必要となる環境の構成や教師の援助について考察するとともに学び続けるために必要となる力について探っていく。

キーワード : 遊び、遊びと学びの関連、学び続ける力

## 1 はじめに

幼児期は、家庭において親しい人間関係を軸にして営まれていた生活からより広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関係、興味や関心などが急激に広がり依存から自立に向かう時期である。また、幼児期は心身が著しく発達する時期であり、「遊び」を通して心と体を十分に動かして発達の課題を達成していくことが大切である。見えにくいといわれる幼稚園での遊びの大切さと学びの関連、生涯学び続けていく力につながる育ちということに視点をあて、自分自身の保育を見つめ直しながら取り組みたいと考えた。

## 2 研究目的

いかに社会が変化しようと、生涯にわたり自ら考え、自ら学び、たくましく生きていくための基礎を培う遊びを通して学び続ける力を育てる幼稚園教育の在り方を探る。

## 3 研究方法

- (1) 「幼児にとっての遊び」「遊びと学びの関連性」「学び続ける力」についての理論研究
- (2) 研究保育や実践事例を通しての具体的研究・考察

## 4 研究内容

- (1) 遊びと学び

### ア 幼児にとっての遊び

幼稚園教育要領には、遊びについて次のように書かれている。「幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。この遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答しあうことに夢中になり、時のたつのも忘れ、そのかわり合いそのものを楽しむことにある。」幼児は、遊びを通して心と体、五感を十分に動かす経験を重ね、発達の課題を達成していく。心が動く、体が動く充実した遊びの中から、安定した情緒、周囲の環境への関心、自ら考え行動を起こす意欲の素地を培っていくのが遊びである。

事例を通して、幼児が充実した遊びを進めていくための教師の援助や環境の構成について考えていきたい。

## イ 遊びと学びの関連性

幼児の遊びは、自分が興味・関心をもった様々なことにチャレンジする中で、変わり、広がっていく。思考を巡らし、想像力を発揮するだけでなく、自分の身体を使って友達と体験を共有したり協力したりしながら遊びに向かっていくのである。このような過程で、幼児は、なるほどと分かること、もう一度チャレンジしながらやっぱりと納得すること、そして次の遊びや自分の生活に生かすこと、などを経験しながら様々な発見やかかわり方を身に付けていく。このような幼児の「学び」とは、小学校以降の学習内容に直接つながるもののみをいうのではなく、幼児がこれまで身に付けていたものをもとにしながら新たに気付いたり、理解が広がったり深まったりしていくものや、新たなことができるようになっていくものとする。

事例を通してこのような遊びの中にみられる幼児の学びの姿をとらえていきたい。

## ウ 学び続ける力

幼児が、イで述べた学びを継続するためには、興味をもった遊びに没頭できる力、友達とかかわり合える力、自分の思ったことを表現できる力、様々なことに気付いたり感じたりする力など、学び続ける力が必要である。遊びの中でこれらの力を発揮しながら、分かる喜びを繰り返し経験する幼児は、心の躍動とともに学ぶ喜びを高揚させていく。このことは、幼児が人として生涯学び続ける力の土台となるものであるとする。

学び続けるためにどのような力が必要となってくるか、事例を通して考え、そのために必要な環境の構成や教師の援助についても探していきたい。

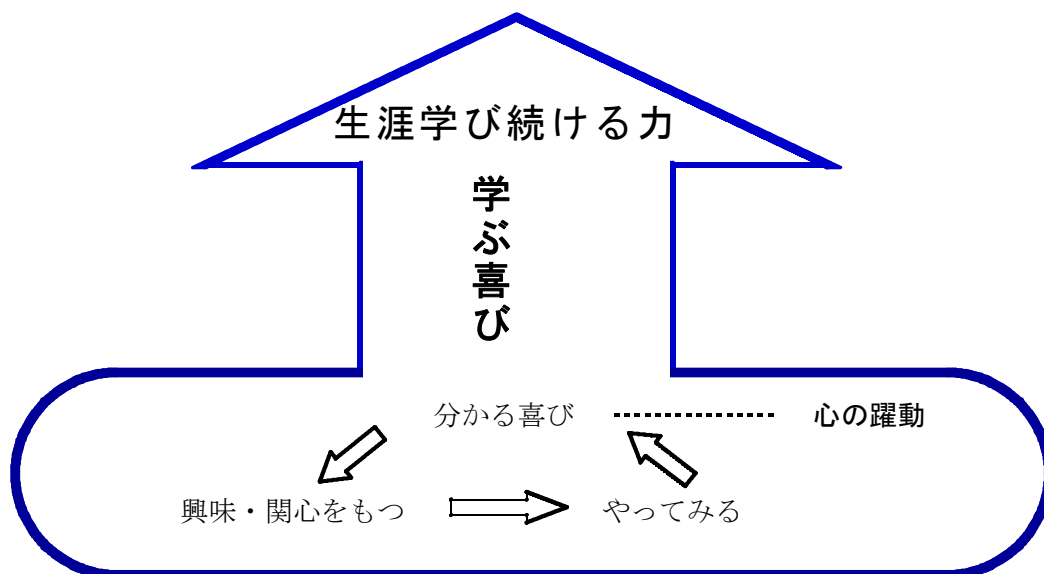


図1 生涯学び続ける力が育つ過程

## (2) 研究保育や実践事例を通しての具体的研究

### 研究の視点

担任している5歳児の子どもたちの育ちを次の3つの段階にとらえ、研究を進めていく。

- ア 自分のやりたいことを見つけ友達との遊びを進めていく時期
- イ 友達と一緒にかかわりながら、考えたり工夫したりして友達と一緒に遊びを進めていくことを楽しむ時期
- ウ 友達と共通の目的をもち、考えを出し合い遊びをじっくりと進めていく時期

ア 自分のやりたいことを見つけ友達との遊びを進めていく時期

園生活2年目ではあるが、クラス替えが行われたことにより、4月当初は、新しい担任や友達、環境の変化に戸惑いや不安が見られる子どもが多かった。一人一人が安定して園での生活を行うことができるようにすることで、やりたい遊びを見つけ、友達との遊びも楽しめるようにしたいと考えた。

また、香芝市は、今年度より全日給食になったため、園での生活の流れが昨年度までと変わってくる。子どもたちの安定した園生活を考えるとき、「食」のことをどうとらえていくかも大切な視点とを感じる。教師は、食育を通して子どもたちの遊びがより充実していくような機会や場を設けたいという思いをもち、子どもたちの遊びの中での姿からきっかけとなることを見逃さないように考えた。

この時期に課題を感じていたK児やM児、学級全体の子どもたちの遊び中に見られる学びについて事例を通して考える。

K児の課題：全日給食が始まると、自分に食べ物の好き嫌いがあることが分かっており、泣きながら登園してくるようになる。

M児の課題：給食中立ち歩く。他の生活習慣においても、登降園時の身支度に時間がかかることや自分のペースで行動することに強いこだわりがある。

子どもの様子

子どもの見取りと教師の思い

子どもの様子の中に見られる学び

※教師の援助

「食育」ということを通して（5月～7月）

(ア)事例1

○ 友達と一緒に食べることって楽しいなあ

《自ら選んで行う活動》5月10日

砂場でごちそうづくりをしている場面

○「できたできた!」「じゃあ、クイズ。さてこれは何でしょう?ヒントは、ぷがつくものやで。」

K 黙っているが微笑んでいる。

Y「わかったー。お花プリン!」

T「正解」3人で顔を見合わせて笑う。

○「今日の給食もこんなおっきいプリンつかへんかなあ。」

T「ほんとやね。先生、今日給食のときOちゃんみたいにクイズだすわね。YちゃんKちゃん、楽しみにしててね。」

○・Y・K「じゃ、給食まで3人の秘密な。」

・K児はままごとやごちそうづくりが大好きである。それまでの遊びの中での友達との会話で、クイズに興味をもつ様子が見られ、さらに、K児が微笑んだということは、関心をもって聞いているととらえた。タイミングよく声をかけられたことで、K児は3人の秘密からはじまったクイズに関心を示すようになった。

※3人の秘密をクラス全体に紹介し、給食クイズへの関心を共有する。

※その日から給食時に毎日クイズを出し続け、クラス全体の給食クイズへの関心を高める。

- ・給食の献立表を見るため早く起きるようになった子どもやメニューを自分でも読みたいと文字を教えてもらいながら見てくる子ども、食べ物の栄養の話を家でも聞いてくる子どもの姿が見られるようになった。献立表を通して、家庭での朝の親子の会話も増えたことがうかがえる。
- ・K児は、教師や仲のよい友達と共通の秘密の話題をもっているということで、給食時にも安心した表情を見せるようになる。

《登園時》 5月12日  
 K「先生、おはよう。Kちゃん今日お母さんに給食だより読んでもらってん。」笑顔で教師のもとへ走ってくる。  
 T「ほんとに？じゃあ何クイズにしようかなあ。」  
 O「私も見てきた！」3人で顔を見合わせて微笑み合う。

《給食の時間》  
 T「今日の魚は何でしょう？よく見て、においして、味わってね。」  
 I「この皮の模様はさばやで〜。」  
 K「ちがう、この味さんまやで一。」  
 I「ぼく、今日帰ったらお母さんにクイズしよう。」  
 K「先生、クイズ楽しいなあ。」友達と顔を見合わせる。

・登園した時から、子どもたちの話題として給食の話が聞かれるようになってきた。

※五感も働かせながら食べるものへの関心を高めてほしいと考えて、色・形・におい・味などに関心がもてる言葉かけをしたり、正解の野菜をもってきて見せたりした。

※クラスだよりやお弁当参観で、給食クイズを始めた後の子どもたちの様子を家庭に伝える。

(イ) 事例2

○ 野菜のもと？「ぼくたち、野菜の父さん母さん」

《学級全体の活動》 5月9日  
 種から野菜を育てる。  
 O「ちっちゃーい！これが野菜のもと？ほんまにできるの？」  
 U「オクラの種ってアサガオよりちっちゃいなあ。」  
 T「今日からは、みんながこの野菜のお父さんとお母さんやね。」  
 M「Mちゃんなあ、明日からお世話ががんばるわ。」  
 次の日から、クラスの子どもたちは、登園後身支度をすませ毎日水やりをするようになった。

(K児)  
 ・献立表を家で読んでくると、クイズが答えやすい。  
 ・給食クイズを友達と一緒に考えることは楽しい。

※種から育てる野菜への不思議さや興味・関心が高まるように、給食クイズの活動と同時期に活動を行った。学級全体活動として種当てクイズを行い、野菜の種への思いを友達同士が共有した後で植える活動を行う。

M児が急いで着替えや持ち物の整理をするようになる。  
 M「いそがなくっちゃ、いそがなくっちゃ。」  
 T「Mちゃん、朝の用意するの早くなったね」  
 M「うん、だってな、Mちゃんな野菜のお父さんやから。早くお水あげなオクラちゃん待ってるもん！」

・自分のペースで生活していたM児が、言葉を発しない野菜の世話をしながら、人に対するように野菜の様子を察する気持ちをもっていることがうかがえる。

※教師はM児の思いを大切にしつつ、つぶやきを認め、クラス全体にも伝えていき、友達の認める声がM児に伝わるようにした。

(M児)  
 ・植物の生長には、水が必要であることが分かる。

M「先生、大発見！オクラちゃんの芽でた！みんなに教えな。」  
 R「Mちゃんすごいなあ、やったね！」  
 オクラの芽が出たことに気付き、M児は友達に伝える。

・M児は、自分の発見をみんなにも見て欲しい、伝えたい、という思いで、言葉を発したと考える。

・R児は、M児の発見を共有することで、オクラの生長に気付くことができた。学びに広がりが見られたことは、喜ばしいことである。

(M児)  
 ・オクラの生長に気付く。  
 ・自分が気付いたことを、友達に認められるとうれしい。



図2 野菜の水やり風景

・M児は友達に認められたことで自信がついて、自分から友達に伝えに行くなど主体的に行動する姿が見られるようになってきた。友達への関心も同時に高まってきたと考えられる。

・M児は、登園すると、目的をもって意欲的に活動に取り組めるようになってきている。

《自ら選んで行う活動》  
 登園すると毎日水やりを続ける姿が見られてくる。  
 M「オクラちゃんおはよう!のどかわいた?」  
 O「はやく用意しなオクラちゃん待ってるで」  
 K「土濡れてる。お腹いっぱいなんかなあ。昨日雨ふったもんな。」  
 「オクラの花って、黄色やな。」  
 「お花がしぼんだとこに実ができたよ。」  
 「オクラの実ってピーンって上むいてるね。」

※オクラのまわりで学級全体活動を行った。自ら選んで行う活動において見つけた発見を、オクラを目の前にしながら友達に伝え合える場を設けた。

(M児・K児)  
 ・雨が降ると、水をやらなくてもよいことに気付く。  
 ・継続して世話をすることは楽しい。  
 (学級全体)  
 ・野菜の生長を友達と一緒にかかわり合いながら観察することを楽しむ。

↓  
 ・友達の気付きに刺激を受けることで、不思議に感じたこと、分かったことなど、伝え合う会話が続けていったと考える。  
 ・子どもたちは、実体験したことを言葉にすることで、改めて自分の考えを確認することができる場となった。

○ 栄養いっぱいおべんとうつくろう 5月下旬～6月頃

↓  
 ・5月17日に遠足に行った。いつもと違う雰囲気の中、楽しくいただくお弁当が楽しかった経験から、自ら選んで行う活動の時間に、お弁当づくりの遊びがはじまった。野菜を育てていることから、野菜を忘れずお弁当に入れていた。

※家庭への啓発として、食育の手紙と種から育てたオクラやトマトの苗を持ち帰る。

○ わーい!野菜のプレゼント 7月4日

《学級全体の活動》  
 A「どれにしようかな。まよいなあ。」  
 O「ぼく本当はオクラ嫌いやけど育ててみようかな。」  
 Y「お家へもって帰るのが楽しみー。お父さんにもはやく食べさせてあげたいな。」

※さらに、弁当参観、夏休みのやくそくカレンダーなどを通して食育の大切さを家庭に伝えていくようにする。

↓  
 ○ ときどきお手紙かいたよ 7月12日  
 一学期の最後の弁当日に家の人にありがとうの手紙を書き、お弁当包みの中にしのばせて帰ることにした。

・自分が育てたという自信、家族に認められている満足感があるからこそ、手紙を準備する子どもの生き生きとした表情が見られたと思う。

《お弁当の時間》  
 M「お母さんにお手紙書くのはじめて!なんて書こうかな。」  
 K「お母さんありがとう!って母さんの笑った顔かくわ。」

(M児・K児)  
 ・自分のうれしい気持ちを表現するには、いろいろな方法があることを知る。  
 (学級全体)  
 ・いつもお弁当をつくってくれている家の人への感謝の気持ちが高まる。



図3 野菜のまわりでの話し合い



図4 ありがとうの手紙

### 考察

- ・子どもが安定した気持ちで毎日の園生活を送ることを考えるとき、基本的な生活習慣の一つ一つの自立が大切になってくる。楽しみながら自分のことを自分でしようとする意欲や、できたという自信の積み重ねの中、一人一人がやりたい遊びを見つけ友達との遊びを進めていくことができる。また、感じたことや課題を家庭にも連絡し、一人一人の生活が連続し充実するような援助を心がけることで、生活習慣の一つ一つが遊びの中で関連付きながら楽しく身に付き、一人一人の安定した生活へとつながることができた。
- ・当たり前食べ物がある、なんとなく言われるから食べる、嫌いなものは食べない、という年度初めのクラスの実態であった。しかし、友達と一緒に食べる楽しさ、食べ物への関心、食べ物から命をもらってる感謝、料理をつくってもらうことの感謝など、食に関する学びがみられたと考える。
- ・食に関連する活動を意図的に継続していき、一人一人へのタイミングを逃さない援助と同時にクラス全体の友達にも認められる場があることによって、子どもたち自らが遊びを楽しむ姿が見られるようになってきた。友達と安心して楽しく遊び、気づきかわることで自分にできることが広がり、さらに遊びが充実していくことができたと考える。

### イ 友達と一緒にかわりながら、考えたり工夫したりして友達と一緒に遊びを進めることを楽しむ時期

一人一人が少しずつ安定し、子どもたちは自分のしたい遊びを見つけるようになってきた。しかし、家庭では、ゲーム遊びを中心として遊んでおり、休日のお父さんとの共通の遊びもゲームが多い。身近な小動物や季節の自然と出会う体験を生かしながら、自然の不思議さを感じ取る力など、感性を豊かにはぐくんでいきたいと考えた。また、友達とかわり、一緒に考えたり工夫したりして遊びを進めていくことを楽しむことができればと思った。

友達とのかかわりに課題をもつS児と学級全体の子どもたちの学びを広げたり深めたりする姿を次に述べる。

S児の課題：一昨年双子の妹が生まれてから母に甘えられずに我慢してしまうことも多い。遊びにもあまり関心を示さず不安な様子が見られた。

### 生き物とのかかわりを通して

#### (ア) 事例

##### ○ つばめさんの家族がやってきた

※教師が先につばめの巣を見つけた。子どもが見つけてくれることを願い、見守る。

5月10日

《自ら選んで行う活動》

前日の園庭開放時に見つけたつばめの巣をO児とS児が誘い合って見に行く。学級全体活動の時に、クラスの友達に話すことを相談する。

《学級全体の活動》

O児、S児の発見をみんなに伝えた後、巣を見に行くことになった。じっと見ているとき、つばめがとんできた。

「わあ、ほんとやつばめさんきた。」「お父さんとお母さんかなあ?」「おうちつくってるなあ。」「OちゃんSくんすごい発見やなあ。」などそれぞれ話をする姿があった。しばらく巣の下で観察をした。

※O児とS児が一緒にいることで2人にとってよい刺激となるのではと感じ、かかわりがつなげていくように声をかける。

※学級みんなで、つばめを見つけたという感動を共有した。つばめをみたい、という気持ちが高まってきたタイミングに巣を見に行くことにする。

・じっと巣を見る子どもたちからは、つばめと自分たちの家族を重ね合わせる言葉がたくさん聞かれた。子どもにとって豊かな体験となったことがうかがえる。

(O児・S児)

- ・2人で思いを共有すると楽しい。
- ・クラスの友達に認めてもらうとうれしい。

(クラス全体)

- ・つばめの巣づくりをじっくりと見る。
- ・自分たちと同様につばめにも家族があることを知る。



5月中頃から下旬

《自ら選んで行う活動》

友達と誘い合ってつばめの巣を見に行くようになる。

S「つばめさんのおうちおっきくなつたなあ。」

O「つばめさんのおうちは何でできてるのかなあ。」

Y「ほら、なんかわらとかもくつついてるで。」

※継続してつばめの巣を観察できるよう言葉かけをしたり、遊びの場を巣の近くに用意するようになった。また、学級全体の活動において、つばめの話をしたり、子どもの気付きを伝え合ったり、巣を見に行ったりすることを続けていった。

※「しぜんとあそぼう～つばめ～」のビデオを視聴する。



《自ら選んで行う活動》 6月1日

色水遊びをしている子どもが上を見上げ、つばめの様子を見ている。

S「あっ、今お父さんとお母さんきてるなあ。」

Y「あのどろんこの土どこの田んぼからとってくるのかなあ。幼稚園の近くかなあ?」

H「昨日な、Hちゃんの近くの田んぼにつばめいてたよ。」

O「昨日より大きくなって。おうち作るの上手やなあ。」

M「すごいなあ、たんぼのどろんこでおうち作ってるねんなあ。ちょっとずつやから何回も運ばなあかなあ。」

M「父さん、母さんってすごいなあ。」

友達と伝え合う姿が見られた。

・ビデオでつばめが巣を作っていた場面を思い出したのか、つばめの様子を観ている子どもたちからは、お互いに学び合う姿がみられる。しっかり観察しながら、不思議に思ったことに対して予想し、その根拠を子ども同士が出し合いながら互いに納得している。さらに、アニミズム的思考により、親子の情愛まで感じている姿ととらえた。

- ・つばめの巣は、田んぼの泥を運んで作る。
- ・つばめをじっと観ていると、たくさんの発見がある。
- ・父さんと母さんは、子どものために一生懸命働く。
- ・自分の見つけたことを言葉で友達に伝えると楽しい。

○ つばめさんがこない

つばめがこなくなった。それは、自分達が騒がしいからだと考えた。子どもたちは静かにしよう、と相談し合った。しかし、登降園の際、家の人にはなかなか静かにしてくれない。どうにかして、家の人も含めたみんなにつばめのことを伝える方法はないか、と子どもたちは考え始めた。

※どうしたらみんなに伝えるのか、自分達で考える様子をじっくり見守った。



図5 つばめの巣発見

○ ポスターをつくらう！

Y「みんなに言うの大変やなあ。」  
 R「じゃあ、静かになってかいてはっこうよ！」  
 Y「それいい考えやなあ。」  
 R「図鑑にツバメのってたよ。それ見てかこうか？」  
 Y「いっばいのってるなあ。どのつばめさんやろ？」  
 R「先生、つばめさん見てきていい？」  
 つばめの巣のところに行って、とんでくるのをじっと待っている。  
 S「つばめさんほっぺたのどこ赤くなった。」  
 友達と分担し合い、ポスターをつくっていった。

・ どうにかしてみんなに伝えたい、という心の動きが、ポスターを描き上げたい、という原動力になっている。その思いが、図鑑と比べながらよく観察したり友達と相談したりして、より本物に見えるつばめの絵を描こうとする子どもの姿になったと考える。

・ ポスターにすると、考えていることが伝わる。  
 ・ つばめをよく観ると、本物に近いつばめが描ける。

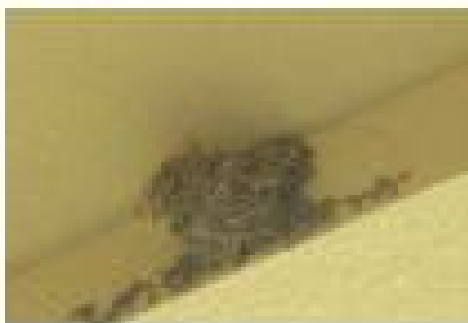


図6 完成したつばめの巣



図7 呼びかけのポスター

○ つばめさんがかえてきた!!

《自ら選んで行う活動》 6月23日  
 M「つばめさんがかえてきたよー！」  
 Y「やったね。」  
 友達と喜び合う姿が見られた。  
 S「やったなー。これからもしずかにしとこうな。」

・ 自分たちの考えが正しかった、ということが確かめられた経験は、大きな成就感となり、一人一人が自信をもつことができたと考える。

・ つばめは、静かな場所が好きだ。  
 ・ 一人ではできないことも、友達と一緒にならできる。

《自ら選んで行う活動》  
 友達と誘い合ってつばめの巣をみにいくようになる。  
 S「つばめさんのおうちおっきくなったなあ。」  
 Y「あっ、今赤ちゃんみえた！」  
 S「ほんま？でも、高くてあんまりみえへん。」  
 O「先生抱っこして！あっ、見えた！ かわいい！」  
 Y「そうや、これに上ったらちよっとよくみえる。」  
 台をもってきて上がって観察する。  
 O「でもあんまり近づいたらつばめさんこわがるかも。」  
 S「先生、また、みんなに知らせよう。」  
 《学級全体の活動》  
 クラスのみんなで巣の近くに集まって座り見続ける。なかなか顔を出さず、しばらく待つ。  
 H「赤ちゃん何食べてるんかなあ？」  
 S「うちの妹はお母さんのおっばいのんでるで。」  
 G「つばめの赤ちゃんはおっばいのまへんのかなあ？」  
 やっと雛が顔を出したとき、息をのんで友達と顔を見合せ「わあー！」という声を上げる。

※子どもたちが気付いたことに対して共感しながら、気付きを友達同士で伝え合えるように援助を続けた。  
 ※学級全体で感動を共有する場を設け、学級の友達とのつながりや一体感を高めていくようにした。

・ 友達同士の会話から、学びの広がりを感じ取ることができた。

(S児)

・ つばめの巣を観ると、たくさんの発見がある。  
 ・ 発見したことを友達に知らせると、友達も一緒に観てくれる。

(学級全体)

・ つばめの赤ちゃんを、学級の友達と一緒に見られた喜びを味わう。



毎日そーっと雛の様子を見ている。

O「つばめ母さん、何運んでるのかなあ。」

S「あっ、ちっちゃい虫な、口にくわえてる。」

Y「赤ちゃんやのにあんなん食べれるのすごいなあ。」

・友達と一緒にみつけたことを喜び合う  
実体験の積み重ねが、一人一人の観察  
力をさらに高めていると考える。

・つばめの赤ちゃんは、虫を食べる。

数日後

H「うわあ、つばめの父さんトンボ捕まえてきた。」

O「食べた食べた!最初は、ちっちゃい虫やったのになんかだんだんでっかいごはんになってきたなあ。」

S「うちの妹も赤ちゃんの時、おっばいとかふにゃふにゃごはんやったけど、今はぼくとおんなじごはん食べれるんやで。」

S「いっぱい食べるからうちもいっぱいやなあ。」

T「みなでお掃除したげようか。」

Y「うちの家、いんこ飼ってるときうちすぐ片付けられるように新聞しいててん。」

S「それいいなあ。先生私らできれいにしたげる。」



図8 つばめの巣の観察

(S児)

・妹やつばめに対する優しさをもつ。

(全員)

・赤ちゃんは、しっかり食べて成長していく。

・親つばめが子どもを一生懸命育てている。

・友達と一緒にだと一人では発見できないたくさん  
のことを発見できる。

・自分の経験したことを伝えたり、友達の  
話に耳を傾けたりして、ともに思い  
や考えを出し合って遊びを進めていく  
ことができる友達関係の高まりを感じる。

### 考察

- ・つばめが幼稚園に巣づくりをするという予期せぬ自然環境との出会いであった。学級の全員が興味をもつ初めての体験であったが、興味を継続させながら、一人一人が自分の感じたことや考えたことを伝え合う姿が見られた。互いに認め合う場がある、という安心感から気持ちが安定し、友達とのかかわりが楽しめるようになってきた。野菜の世話から引き続いて、つばめの気持ちになって察したり、分からないことを図鑑で調べたりするなど、学び続ける子どもの姿がそこには見られた。一人一人の発見を友達と共有することで見られた協同の学びへ向かう学級全体の高まりだと考える。
- ・学級の中で、子どもたちは自分の得意なことや興味をもつことなどを出し合い、その楽しさを発揮する姿が見られてきた。一人一人のもつ課題を明らかにし、援助のタイミングや方法を教師が適切に行うことで、学級全体の高まりとともに課題を乗り越えていく子どもの姿が見られたと考える。
- ・豊かな体験は子どもが学び続ける力の源となり、遊びを継続させるとともに感性を育てていくことができると考える。

### ウ 友達と共通の目的をもち、考えを出し合い遊びをじっくりと進めていく時期

運動会という一つの行事を経験し、友達と目的をもって遊ぶ楽しさや満足感を味わう心地よさを感じる心が育ってきた。運動会の中で、子どもたちは、ルールが必要なことを経験した。運動会后、友達と一緒に楽しく遊ぶために、自分たちでルールを工夫する子どもたちの姿が見られるようになってきた。少しずつだが、学級としての連帯感も高まってきているのを感じる。一人一人の感じる心が豊かになり、学級の中で自己発揮し、友達と共通の目的ある遊びが増え

てきた。

次に、1学期から、自己表現に課題をもつF児とE児を通して、友達と共通の目的に向かう学びの姿を事例を通して考えていく。

F児の実態：一学期には自分の思いを話すことが少なかったF児がリレーの後泣いていた。「ママとパパがぼくのことずっと応援してくれてうれしかったん。」自分の気持ちを表現するようになった。

E児の実態：マイペースで、自分の思うようにならないと怒って遊びをやめてしまうことが多かった。運動会后「母さんがほめてくれて、なんかわからんけど、ここ（胸）がきゅーんてしてん。」何かをやりとげ認められる満足感を味わう様子が見られた。

### ルールのある遊びを通して

#### (ア) 事例

##### ○ いい考えやなあ！

《自ら選んで行う活動》 10月16日  
 友達と誘い合ってドンジャンケンをして遊ぶ。  
 自分たちでラインをひいてジャンケンを始める。  
 R「ぼくこっちのチーム。」  
 D「じゃ、私こっちのチーム。」  
 2つのスタート地点にそれぞれ分かれる。  
 K「よくわかるように帽子で赤チームと白チームにしよう！」  
 F「うん、それいい考えやね。」  
 E「私もいれて！」  
 R「いいよ！一緒に遊ぼう。」  
 しかし、次々とやってくる子どもたちが好きなチームに入るため、人数に差ができてくる。  
 D「なんかそっちいっぱいやからいいよなあ。」  
 E「ほんま、絶対そっちがすぐ勝つよなあ。」  
 T「なんかいい方法ないかなあ。」  
 R「じゃ、グッパしてもう一回チーム決めよう！」  
 F「うん、それいい考えやねえ。」  
 なかなか決まらずけんかになる  
 D「もうちゃんと出してよ。決まらんやん。」  
 (仲のよい友達と一緒にやりたくて後出しする子どももおりトラブルとなった。)  
 H「私、もうやめる。」(違う遊びに行ってしまう。)  
 R「じゃ、先に2人ずつにわかれてじゃんけんしよう！」  
 E「それいいなあ。怒ってたら楽しくなくなるもん。」  
 チームわけができたが、すぐ片付けの時間になる。  
 R「あーあ、ちょっとしか遊べへんかったなー。」

- ・日頃から、男女を意識しすぎることなく生活できるように配慮していたせいか、仲のよい友達同士や男児・女児同士にわかれることなく、一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。
- ・運動会で帽子の表裏でチームをわけた経験を生かして遊ぶ姿が見られたと考える。



図9 ドンジャンケン初めの頃

- ・遊びの中で、自分の考えをしっかりと伝える。
- ・トラブルが続いてしまうと、遊びたいことができなくなってしまう。

※遊びの中でのトラブルを意味あるものとするために、学級全体で話し合いを行うことにした。

《学級全体の活動》  
 その日の話し合いで朝の様子を伝える。  
 R「明日は、すぐチームわけていっぱい遊べるようにしたい。」  
 E「けんかしてたら楽しくなくなるもん。」  
 F「誰と一緒にいってもみんな友達やしな。」

- ・困ったことも、意見を言って話し合えば解決できる。

翌日から朝の用意をすると友達と誘い合ってすぐに園庭に出ていく姿が見られた。遊んでいる途中、線が消えたり、早く進みたくて線から飛び出して走る子どもがいたりした。

H「Dちゃん、線のところ走らな近道したらずるいで！」

D「だって・・・。」

R「線、細かったらみんな走りにくいなあ。」

E「じゃ、線太くしよう。」

K「ほんまやなあ。」

E「Eちゃん線ひいてみたい。」

D「ぼくも！」

E「じゃ、交代でね」

線を引いた後、

F「わあー、すごい走りやすいなあ。Eちゃんグッドアイデアやなあ。」

※幼児同士が自分の思いを出し合う過程を大切にしようとする。

・友達と一緒に話しているときも、自分の考えをきちんと伝えている。昨日のトラブルの後の話し合いが次の日の活動に生きていた。1学期に協同の学びに向かう体験をしたことが土台となり、互いのよさを認め合う学級の風土をつくっていることを感じる。

(F児・E児)

- ・一つの目的をもって、友達と一緒に遊ぶと楽しい。
- ・友達と話し合いながらその考えを受け入れ、新しいアイデアや遊びのルールを考え出すことは楽しい。

F「楽しかったなあ。また、明日も一緒にしよう。」

K「うんうん！絶対しよう。」

E「私もしたい！じゃ明日ここでね。楽しいから明日ももっとみんなよんできたら？」

F「いいねえ、そうしよう！」

・一つの目的に向かい、友達と相談しながら新しいアイデアを見いだす子どもたちの様子は、遊びの楽しさを実感している姿ととらえる。

(E児)

- ・友達と一緒に話し合ったら、遊びを楽しめるルールが考えられる。

(F児)

- ・遊びが楽しくなるように、自分の役割を考える。

○ 年少組さん一緒にしよう

年少I「何してるの？」

E「ドンジャンケン。こっちからとあっちからと走ってきてじゃんけんするねん。一緒にやってみる？」

I「うん、ぼくもしたい。」

E「いいよ。一緒にしよう。Eちゃんの前おいで。大丈夫？ちょっと線みじかくしようか？」

F「じゃ、ぼくが走りやすいように引いてくるわ。」

I「ありがとう。先生、お兄ちゃんとお姉ちゃん、やさしいなあ。」

少し短めで幅を広くコースをかけた。また、年少児も遊びやすいよう思いやる姿が見られた。

※年少児を思いやる姿を、学級全体活動の場で伝え、認める。

(E児)

- ・自分が友達の役に立っている。

○ どんどん楽しくなってきたー！

《自ら選んで行う活動》 10月下旬～11月上旬

雨上がりの朝、ラインカーの入った倉庫がしまっていた。足で線を引き始めた。

R「わー、すごいかける！おもしろいなあ。でも靴どろんこになっちゃうなあ。」

E「前にさあ、お庭に棒でうさぎさんとか描いたよね。なんか棒探そう。」

R「先生、なんか棒ない？」

T「あるよ。どれにする？」

棒を選んで線を描きはじめる。

R「わあ、棒で描くのおもしろい。今日どんな形にする？」

F「どんな形にしようかなあ。」

F「迷路みたいにながーくて、ぐにゃぐにゃ道にしようか？」

E・D「いいねえ、そうしよう。よーし、もっともっと長くするぞし！」

・一学期の雨上がりの日、園庭に棒で絵を描いて遊んだ。その経験がここで生かされたと考える。

・遊びの経験を生かすと、より遊びが楽しくなる。  
・材料の性質を分かって遊びに取り入れる。

線ができると、目を輝かせて遊び始める。

E「やったー！今度は私のチームが勝ったー。」

K「わあ、負けて悔しいなあ。でも、どんどん楽しくなってきたなあ。」

E「Eちゃんのチーム勝つの2回目」

F「じゃ、ドッジボールとかサッカーみたいに点数つけようよ！」

H「うん、そうしよう！今度は負けないで！ここに点数書いとくわ。」棒で〇—〇と点数をかく

E「ほんまやなあ。なんかうれしい気分！明日もまた一緒に遊ぼう！」

R「うん、また一緒に遊ぼう。」

R「あっ、先生、片付けの時間や。ほら(時計をさす)」

H「今日の勝負は3—2で白チームの勝ち！」

白チーム「やったー！」

赤チーム「くやしいなあ。」

E「ほんまやなあ。なんかうれしい気分！明日もまた一緒に遊ぼう！」

R「うん、また一緒に遊ぼう。」

F「じゃ、明日もここに集合な！」



図10 ドンジャンケン  
遊びが進んだ頃

※それぞれの工夫を認め合う姿を学級全体の活動で積極的に紹介する。  
 ※片付けの時間を予め知らせ、子どもたちが時間を組み立てて遊べるようにする。

・子どもの姿からは、遊びが次の日につながっていくワクワク感を友達と共感するうれしさが感じ取れた。

・自分だけが楽しく遊べるのではなく、みんなが楽しく遊べる方法は、友達と相談すると見つかる。

**考察**

- ・遊びの中の会話から、次の日の遊びはもう始まっていると感じた。明日へつながっていく、つなげていく保育を意識しなければと思う。
- ・共通の目的をもち、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じる姿が見られた。友達と考えを出し合いルールを工夫することで楽しさが増すことを身体で感じ、子どもたちの気持ちの一体感が高まったように思う。友達と誘い合ってじっくりと一つの遊びを繰り返し遊び込む様子が見られるようになり、遊びに没頭する満足感が子どもの学び続ける力となっていることを感じる。
- ・一人一人の育ちが学級全体としての高まりを生み、さらに、集団の力が一人一人を育てていくことにつながると感じた。この繰り返しによつ協同性が高まり、子どもの自発性をはぐくむことができたと考える。

**5 研究結果と考察**

- (1) 子どもが遊びを充実させていくためには、幼稚園の保育時間の流れの一つ一つを改めて見つめなおす必要がある。特に、「自ら選んで行う活動」と「学級全体の活動」との関連性を考えた保育を進めていくことが、遊びの中の学びを充実させていくためには必要だと考える。
- (2) 子どもが学び続ける力を付けていくためには、一人一人の発達をていねいに見るとともに、学級全体が、今どのような育ちを援助していく時期かということ常に関心しておく必要がある。子どもの興味・関心がどこに向いているのか明らかにして保育に臨むことで、教師は援助や環境の構成を的確に行うことができる。
- (3) 今回は、本年度担任をしている5歳児の事例を中心にまとめた。5歳児の、友達とのかかわりが活発になり、共に考えたり、工夫したり役割をもったり、自分達で遊びのルールをつくったりしながら友達との生活を楽しむ姿を多く見ることができた。子どもが意欲的に遊びながら、自分もった疑問や課題に対して、これまでの経験や自分の中にある感性を総動員して解決に向かう様子は5歳児ならではの学びに向かう姿といえるのではないかと思う。  
 子どもが一つの遊びを継続して行い、遊びが広がったり深まったりするときに見られる学びを学び続ける力ととらえることができるのではないかと考える。

- (4) 遊びを通して学び続ける力を育てる保育を進めていこうとするとき、家庭との連携や啓発の大切さを痛感する。幼稚園で今どんな力を育てようとしているか、幼児にとって遊びが今どんな意味をもつのか具体的に保護者に伝え、連携していくことが大切である。

## 6 今後の課題

「研究結果と考察」の(3)で述べたような子どもの姿に育っていくためには、子どもの入園からの日々の遊びを充実させていくことが必須であると考え。その時期の保育の在り方について、考えていかねばならない。

さらに、「遊びを通して学び続ける力を育てる保育」を考えると、小学校における教育との連携を抜きにすることもできない。幼児期と児童期の教育について研修を進め、連携の在り方を考えていくことが今後の課題と考える。

## 参考・引用文献

- |                         |              |        |     |
|-------------------------|--------------|--------|-----|
| (1) 文部省                 | 幼稚園教育要領解説    | フレーベル館 | 平11 |
| (2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター | 幼児期から児童期への教育 | ひかりのくに | 平17 |